

2022 AC

1<sup>st</sup>. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

15日(夜) No.13

# 「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

## ①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

## ②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

# 「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

## ③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。  
これらのもののうち、どれも失われていない。  
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。  
それは、主の口がこれを命じ、  
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

# 「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるように「シエーム・イエシュア」と呼びつつ、学んで行きたいと思います。

# 創世記1章のこれまでの流れ

●今回取り上げる箇所は創世記1章29～31節です。29～30節は創造された人が食べる「食物」について、31節は第六日の「見よ、それは非常に良かった」という神のご計画の喜びの宣言がなされています。

第一日	2～5 節	光	神は光を良しと見られた	夕があり、朝があった
第二日	6～8 節	大空(天)		夕があり、朝があった
第三日	9～10 節	地と海	神はそれを良しと見られた	
	11～13 節	植物	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第四日	14～19 節	光る物(太陽・月・星)	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第五日	20～23 節	水の中の生き物、 翼のある空の鳥	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第六日	24～31 節	地の生き物 人と食物	神はそれを良しと見られた 見よ、それは非常に良かった	夕があり、朝があった

# 1. 「食物」 (הַלֶּחֶם) ①

●人は神が与える食物を食べることによって、御子の「似姿」(「デムート」 דְמוּת)が完成します。

29 神は仰せられた。「見よ。わたしは、地の全面にある、種のできるすべての草と、種の入った実のあるすべての木を、今あなたがたに与える。あなたがたにとってそれは**食物**となる。

30 また、生きるいのちのある、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を這うすべてのもののために、すべての緑の草を**食物**として与える。」すると、そのようになった。

●「**食物**」は「オフラー」(הַלֶּחֶם)という女性名詞です。その語源は「食べる」という意味の「アーハル」(אָחַל)です。しかしこれは私たちが口から食べる食物のことではありません。人が草や木を食べるでしょうか。これは「人の**霊**」が**食べる食物**なのです。「主の祈り」の「日ごとの糧」もそうです。

# 1. 「食物」 (הַלֶּחֶם) ②

● イエシュアが悪魔の試みを受けるために、御霊に導かれて荒野に上って行かれました。そして40日40夜、断食をされました。そのあとで、試みる者が近づいて来た時にイエシュアが語られたのが以下のことばです。

【新改訳2017】 マタイの福音書4章4節

イエスは答えられた。「『人はパン(ἄρτος/ロフ)だけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことば(ῥήμα)で生きる』と書いてある。」

● これは申命記8章3節の引用です。イスラエルの民は、40年間の荒野の生活で神からのマナ(ヘブル語は「マーン」מָן)が与えられ、それを食べました。このマナは「天からのパンであるキリスト」の予表です。イエシュアは「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです」(ヨハネ6:63)と言われました。イエシュアの数々のことば(ῥήμα)は、私たちの「**霊の食物**」なのです。

# 1. 「食物」 (אֱכֹלָת) ③

●なぜ、神は人に食物を与えられるのでしょうか。順序が逆になりますが、神が人に食物を与えられる理由があります。それは28節の命令を成就するためです。28節と29節はつながっているのです。

【新改訳2017】創世記1章28節

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。

「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、  
地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

●神が人に食物を与える目的は、以下のことが成就するためです。

(1) 「人が生み、増え、地に満ちるため」

(2) 「地を従え、すべての生き物を支配するため」

これらは「王なる祭司としての務め」を意味します。「王なる祭司の務め」  
= 「デムート (דְמוּת) の完成」 = 人の創造(回復)の究極の目的



# 1. 「食物」 (אֲכָלָה) ④

● 神はご自身のかたちに創造された人を「彼ら」と呼び、祝福して「生めよ。増えよ。地に満ちよ。」、そして「地を従えよ」「生き物を支配せよ」と命じています。文字通りすべて命令形です。

## (1) 「人が生み、増え、地に満ちるため」

● 「生めよ」(「パーラー」 אָפֶּר)は「多くの実を結ぶ」ことを意味します。「増えよ」(「ラーヴァー」 אָבֵר)は文字通り増やすことを意味します。しかし単に数が増えるだけではなく、イエシュアが「ぶどうの木のとえ」で言われたように、多くの実を結ばせることによって、御父の栄光が地に現されることを意味します。「満ちよ」(「マーレー」 אָמַל)は、地における神のご計画を実現することを意味します。

# 1. 「食物」 (אֲכָלָה) ⑤

## (2) 「地を従え、すべての生き物を支配するため」

● 「**従わす**」 (「カーヴァシュ」 וְשִׁבַּרְתָּ) は「踏みつけ、征服し、支配すること」を意味します。ヨシュアに率いられたイスラエルの民は、約束の地カナンを征服しましたが、その地を完全に征服し、イスラエルの全部族をまとめて支配したのはダビデです。ダビデは約束の地に真の安息をもたらす王なるメシアの「型」です。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される」(黙11:15)とあるように、キリストが再臨されると、全地は彼が支配するメシア王国となります。

● 「**支配する**」 (「ラーダー」 אָדָר) は「人が神の代理者として地の生き物を支配すること」を意味します。ちなみに「海の魚」は贖われた異邦の民を、「空の鳥」はイスラエルの残りの者を、「地の上を這うもの」は神に敵対する勢力(諸国の民)を象徴するたとえです。

# 1. 「食物」 (אֲכִלָּה) ⑥

● 「人の霊」に与えられる「食物」

a. 種のできるすべての草(草「エーセヴ」 עֵשֶׂב 種「ゼラ」 זֶרַע)

b. 種の入った実のあるすべての木(実のある木「ペリー・エーツ」 פְּרִיעֵץ)

● 人以外に与えられる「食物」

すべての緑の草(緑の草「イエレク・エーセヴ」 עֵשֶׂב יָרוֹק)

● 「人の霊」が食べるべき食物は「種のできる草」と「種の入った実のある木」です。しかし人以外の生き物たちには「緑の草」が与えられます。何が違うのかと言え、食物に「種」があるかないかの違いです。種には「いのち」があります。「緑」(イエレク)の語源「ヤーラク」(אֲרָק)は「唾をかける」という恥ずかしめの行為を意味します。

# 1. 「食物」 (הַלֶּחֶם) ⑦

(1)人(男と女)に与えられる「食物」・・・「種」を含む食物  
※「種」とは「イエシュア」のこと

- a. 種のできるすべての草: キリストに導く養育係のような食物  
モーセの律法 幼稚な(初歩の)教え  
罪と死の律法 肉に属する人
- b. 種の入った実のあるすべての木: 永遠のいのちをもたらす食物  
キリストの律法 義の教え  
いのちの御霊の律法 御霊に属する人

※aとbの違いをパウロは記しています(ロマ8:2, Iコリ3:1~3, IIコリ3:6, ヘブル5:13~6:1)。

(2)人(男と女)以外に与えられる「食物」 「種」を含まない食物  
すべての緑の草・・・キリストのない教え

# 1. 「食物」 (הַלֶּחֶם) ⑧

● 人に与えられる食物の中で「種の入った実のあるすべての木」とは、イエシュア・メシアが語るみことばです。「いのちの木」であるイエシュアを食べる者が、永遠のいのちを得ることができます。

● 「食べる」(飲む)という行為は、その**食べ物と一体となること**を意味します。食べる器官は「**人の霊**」です。心でも、お腹でもありません。イエシュアの食物は御父と一体となるためのものでした。

【新改訳2017】ヨハネの福音書 4章32, 34節

32 ところが、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたが知らない食べ物(הַלֶּחֶם)があります。」(※「オーヘル」 הַלֶּחֶם は**男性名詞**)

34 イエスは彼らに言われた。「わたしの食べ物(הַלֶּחֶם)とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。」

# 1. 「食物」 (אֲכָלָה) ⑨

【新改訳2017】ヨハネの福音書6章54～58節

54 わたしの肉を食べ(אֲכָלָה)、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

(※「ハーオーヘール」 אֲכָלָה は「**食べる者**」の意で、冠詞付きの分詞)

55 わたしの肉はまことの食べ物(אֲכָלָה)、わたしの血はまことの飲み物なのです。

56 わたしの肉を食べ(אֲכָלָה)、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを**食べる者**(אֲכָלָה)も、わたしによって生きるのです。

58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて(אֲכָלָה)、なお死んだようなものではありません。このパンを**食べる者**(אֲכָלָה)は永遠に生きます。」

# 1. 「食物」 (הִלְכֵם) ⑩

【新改訳2017】コロサイ人への手紙 3章 16節

キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。

●これは「**主を食べること**」と同義です。神は人を創造したときに、人を園にあるいのちの木の前に置いて何と言ったのでしょうか。

【新改訳2017】創世記2章16節

神である【主】は人に命じられた。

「あなたは園のどの木からでも**思いのまま食べてよい**(הִלְכֵם הִלְכֵם)。」

●「アーホール・トーヘール」(הִלְכֵם הִלְכֵם)は「不定詞+未完了形」による強調形です。「あなたは園のすべての木から**大いに食べてよい**」と訳すこともできれば、「あなたは園のすべての木から**必ず食べなさい**」と訳すことができます。このように聖書は、最初から「食べること」を強調しています。

# 1. 「食物」 (אֲכָלָה) ⑪

●最後に、「主を食べる」方法があるとするならそれは何でしょうか。

【新改訳2017】エレミヤ書33章3節

『わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたが知らない理解を超えた大いなることを、あなたに告げよう。』

「シエーム・イエシュア」

יֵשׁוּעַ יְהוֹשֻׁעַ

●主を食べるには、私たちの霊を用いなければなりません。それはすべてに勝る「イエシュアの御名」を呼び求めることです。主の名を呼び求めることによって主を食べるのです。それは蜜のように甘く感じるはずです。「私(エゼキエル)がそれを食べると、それは口の中で蜜のように甘かった。」(エゼ3:3)



## 2. 「神の満足(トーヴ・メオード)」①

【新改訳2017】創世記1章31節  
神はご自分が造ったすべてのものを見られた。  
見よ、それは非常に良かった。  
夕があり、朝があった。第六日。

「見よ、それは非常に良かった」

メオード トーヴ ヒンネー  
מְאֹד טוֹב הִנֵּנִי

●第二日を除く他の日には、すべて「神はそれを良しと見られた」とあり、第六日に至っては「メオード」(מְאֹד)がついて「非常に良かった、はなはだ良かった、極めて良かった、すばらしいものであった」という表現で締められています。まさに神の感動と満足と喜びが伝わってきます。

## 2. 「神の満足(トーヴ・メオード)」②

●それぞれの日には「夕があり、朝があった」(「ヴァイエヒー・エレヴ、ヴァイエヒー・ヴォーケル」 וָאֵיֶהֱיָ וְעֶלֶב וָאֵיֶהֱיָ וְוֹקֵל)という創造のリズムを表わすフレーズが置かれています。そのフレーズは第六日が最後となっています。ということは、第七日(創2:1~3)は昼のままで夜がないことになります。夜のない「昼」は永遠に神の栄光が照らされることを意味します。

【新改訳2017】ヨハネの黙示録21章23~25節

23 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。

24 諸国の民は都の光によって歩み、

地の王たちは自分たちの栄光を都に携えて来る。

25 都の門は一日中、決して閉じられない。そこには夜がないからである。

# 今回のまとめ

● 神がご自身の人(=第二の人)を創造されたのは、地を回復して天と地を一つにするためです。茫漠とした地を回復するためには、人(=第二の人を信じる「新しく造られた者たち」)を、**御子のかたちと似姿**にする必要があります。そしてその人に主権を与えて地を支配させ、治めさせるために「種の入った実のあるすべての木」を食物として与えたのです。その木とは「いのちの木」です。人はその木を霊の中で食べることによって、神のご計画とみどころ、みむねと目的を実現するようにされるのです。

● 「人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は**多くの実を結びます**」(ヨハネ15:5)とあります。イエシュアがとどまるのは「人の霊」の中です。そこは Secret Placeでサタンが決して入り込むことのできないところです。人の霊の中にイエシュアがとどまるためには、神の一連の出来事(受肉・・昇天・着座/内住)が不可欠でした。私たちの回復は霊の中で始まったのですから、**霊の中で生きることを選び取る**べきです。